

トレンド・ワード

スペシヤルニーズ

生徒の学びや進路選択、そしてその後の人生に影響を与えるような革新的な技術や価値観を「社会のトレンド」として、「暮らす」「学ぶ」「働く」の観点から解説する本コーナー。今回は「スペシヤルニーズ」を取り上げる。それは、発達障害を始めとする発達の遅れや身体の障害などによって、様々な支援を必要とする状態を表す言葉だが、個別最適化やダイバーシティ（多様性）といった、未来社会を語る上でも重要なキーワードとなっている。発達障害のある高校生のためのサポートセンターで普通教育を行う明蓬館高校校長・理事長の日野公三先生（*1）に話を聞いた。

サマリー

障害を「ニーズ」として受け止め、それぞれの能力を最大限発揮できる支援を行う

障害の特性を理解して
 個々の学びをサポートする

近年、様々なメディアで「発達障害」がテーマとして取り上げられることが多い。当事者やその家族の声を聞く機会も増え、発達障害、特に「自閉症スペクトラム障害（ASD）」「注意欠陥・多動性障害（ADHD）」「学習障害（L

D）」に対する社会の理解も進んでいる（図1）。2012年の文部科学省の調査（*2）では、小・中学校の通常学級に在籍する児童・生徒のうち、6.5%に発達障害がある可能性が示されており、日本の教育を考える上での大きなテーマとなっている。

スペシヤルニーズの持ち主」と捉えて、それぞれの得意・不得意に応じた学習環境を整え、豊かな学びを実現しようといった動きも生まれている。

「以前は、発達障害は本人の努力不足や保護者の育て方が原因で起こる障害だといった間違った認識もありました。そのため、発達障害のある子どもたちは、『やれ

図1 発達障害の種類と障害特性

自閉症 スペクトラム 障害	対人コミュニケーションを苦手とし、特定の物事へのこだわり（パターン化した行動、興味・関心の偏り）、言葉の遅れなどの特性を持つ。知的な遅れを伴うケースもあれば、通常と変わらないケースもある。
注意欠陥・ 多動性障害	不注意（集中できない）、多動・多弁（じっとしてられない）、衝動的に行動する（考えるよりも先に動く）といった行動特性を持つ。自己コントロールが苦手。
学習障害	読む、書く、計算するなどの能力のうち、特定の能力において、その習得と使用の両面で極端な苦手を抱える。特定の高次脳機能の障害のため、一生懸命学習してもその効果が表れない。

* 学校資料を基に編集部で作成。

* 1 明蓬館高校の授業の様子は、本誌 2019年 8月号 P.46-47「高校教師 study-tour」にも掲載しています。
 * 2 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」

解説者



内閣府認定特区高等学校
 明蓬館高校
 校長・理事長
日野公三
 ひのこうぞう
 著書に『発達障害の子どものための進路と多様な可能性』（WAVE出版）。

図2 学校現場で表れる発達の特徴

学習面で表れる特性

- 適切な速さで話すことが難しい
- 物事の因果関係を理解するのが難しい
- 指示の理解が難しい など

行動面で表れる特性

- 気が散りやすい
- 着席中も手足を動かし、じっとしていられない など

対人関係で表れる特性

- 共感性が乏しい
- 比喩やたとえが分からず、言葉通りに受け取ってしまう
- 対人関係をうまく築けない など

* 学校資料を基に編集部で作成。

ばできる』といった言葉に苦しみ続けられ、自己肯定感の低下によって、自傷行為や引きこもりといった2次障害を起こしてしまいうケースも多くありました。しかし近年、発達障害は脳機能の障害による発達の偏りであることが認知されるようになると、本人の発達の特性を踏まえて、よりよい社会生活を送れるようにサポートする考え方が広まってきました」

一人ひとりがかけがえのない存在として力を発揮する社会へ

人の発達の特性には凸凹がある。例えば、児童向けの知能検査WISC検査では、言語的な情報

を理解する能力、非言語的な情報を基に推論する力、情報を記憶にとどめてそれを操作する力、順序よく処理・識別する力が数値化されるが、多くの子どもに得意な領域と不得意な領域が存在する。

「誰にも発達の凸凹があります。文字の読み書きが苦手な生徒、音声による指示の理解が苦手な生徒など、周囲がそれぞれの生徒の特性に気づいた時、WISCのような検査につなぎ、科学的な診断を得ることで、本人の努力不足などではないことが明らかになります。その上で、読み書きが苦手な生徒のために音声の読み上げソフトを使ったり、学習に集中しやす

いように教室の掲示物は最小限にとどめたりするなど、学習環境を整えることで、一人ひとりの能力や適性に応じた学びが実現します(図2)」

現代は、構成員の多様性を保障し、強く健全な組織をつくろうといったダイバーシティの視点が企業などで求められている。人種や性別、年齢、ライフスタイル、学習スタイルなどにこだわらずに多様な人材を生かし、それぞれの能力を最大限に発揮させようという考えは、障害という診断を持った人だけが対象ではない。個々人に必要な合理的配慮に基づいて公正な教育の実現を目指すことは、すべての人の幸福につながると考えられる。

現状の教育環境には適応しないが、特定の領域で突出した力を発揮する生徒もいる。事実、発達障害があっても、研究者や芸術家として第一線で活躍する人も少なくない。

「多数の人が適応している学び方が合わないからといって、学びそのものできないと考えるのは間違っています。人とは違った道

だけれど、それが自分に合った道で、自分の目指す方向に向かって進んでいるのであれば、それは学びからドロップアウトしたのではなく、スピニングアウトしたにすぎないと私は思います」

かつて「学習障害」は、英語圏では「Learning Disorder」や「Learning Disability」など、「障害」を示す言葉を使って表現されていた。しかし、近年は「Learning Differences」という言葉が一般的になり、学び方における「違い」であるという認識が広まりつつある。加齢や病気などで心身の状態が変化する中で、人はいつかは「スペシャルニーズ」の持ち主となる。少子高齢化が進む社会で、一人一人ひとりを大きな可能性を持ったかけがえのない存在として考えることで、社会のあるべき姿も今とは違って見えてくるのではないだろうか。

● 次ページからは、「学ぶ」「働く」「暮らす」の3つの切り口で、「スペシャルニーズ」について、現状と課題を見ていく。

学ぶ

学習・評価方法が多様化し、個別最適な学びへ

一人ひとりに合った 学習スタイルへ

全国広域通信制高校である明蓬館高校は、発達障害の支援スキルを持った支援員、臨床心理士などの相談員、そして各教科の教員がチームとなって発達障害のある生徒を支援するSNEC（スペシャルニーズ・エデュケーションセンター）を全国に設置している。生徒は、パソコンやタブレットを活用



写真1 学習に没頭しやすいように配慮された机。話し合いが必要な時、生徒はオープンスペースに移動する。

用して、興味・関心に合った授業をオンラインで視聴し、自分のペースで学習を進める（写真1）。成績評価はペーパーテストに加えて、レポートや制作物などの学習成果物などを通じて多面的に行われる。

発達特性に合った学習環境を整えることで、大きく成長する生徒が少なくない。例えば、短期記憶が苦手な、教師が板書する内容をノートに自筆で書き写すことが困難だったある生徒は、タブレットのカメラ機能を使って板書を撮影することで授業に集中できるようになった。学びの意欲も高まり、自ら探究的な学習に取り組むようになり、AO入試で難関大学合格を目指した生徒もいた。

「近年、全日制の高校において、ICTを活用した授業が増え、成績評価も、ペーパーテスト中心から多様な活動を対象とする多面的・総合的な評価に変わりつつあ

図3 スペシャルニーズを持つ子どもへの支援のポイント

- 1 教職員が発達障害の正しい診断名と診断基準、特性について理解する
- 2 教職員がネガティブな言葉、態度を安易に用いず、ポジティブな言葉、態度を意図的に、しかし自然に用いる
- 3 学校内にアセスメント体制がある。医療機関との緊密な連携体制がある
- 4 生徒数に見合った、臨床心理士や特別支援教育の学習支援者、精神保健福祉の有資格者がいる
- 5 個別の教育支援計画を運用する
- 6 保護者への相談支援を行う
- 7 卒業後の進学、就労における継続的な支援に役立つ、個別の教育支援計画と支援実績を蓄積する
- 8 紙のプリントを極力少なくし、多様なデバイス（PC、タブレット、スマホなど）を使ったeラーニングで、課題レポートに取り組めるようにする
- 9 課題レポートについては即時の採点とフィードバックを行う
- 10 成績評価を制限時間つきの一斉テストに依存しない。多様な成果物（ポートフォリオ）、多様な評価軸で評価する
- 11 生徒がWebベースで学びやすい認証ページ（学習支援システム）および生徒管理システムを運用する
- 12 校長あるいは副校長が議長を務め、校内委員会、ケース会議を定期的に行う
- 13 就労移行支援事業所からの情報収集を行う
- 14 登校時に落ち着いて学習に取り組めるブース環境を用意する
- 15 学習障害の個別的なニーズに沿った教材および補助教材を提供する体制がある

* 学校資料を基に編集部で作成。

ります。不得意な領域を持つ場合に適切な診断を行い、特性に合った支援をすることで力を発揮する生徒は、どの学校にもいると思います。生徒が集う学校という場で、

生徒の多様な学びを保障する これからの学校の体制

一人ひとりの生徒の特性に合わせてカスタマイズされた学びを提供することができたなら、生徒にとっては、教科学習だけでなく他の特性や教室での困り事をキャッチ

個別最適化された学びは、ICT

が普及すれば実現するものではない。一人ひとりの生徒の学びの

特性や教室での困り事をキャッチ

する校内体制の充実が不可欠だ。
図3は、発達障害がある生徒の個別最適な学びを支援するためのポイントを、明蓬館高校がまとめたものだ。個別最適化された学びを

働く

それぞれの能力を生かして競争力を高める

コンサルティングやIT、製造業など、業種を問わず、世界有数の企業が、働く人たちの多様性を担保するダイバーシティ経営の努力を続けている。それは、企業の社会的責任からだけでなく、競争力を高めるために必要だと考えられている。性別、年齢、国籍、障害の有無、キャリアや働き方などにおいて多様な人材が、それぞれの能力を発揮することで、イノベーション（技術革新）が起り、価値創造につながるからだ。

AI（人工知能）の発達によって、今ある仕事の多くが今後自動化・機械化し、社会のあり方も大きく変わると予測されるが、そうした社会においては、企業には、

実現する未来の学校とは、ハード、ソフト両面でのような支援を行っていく学校であるかが、そこから見えてくるだろう。

目指すべき社会のあり方を模索しながら、そこで必要とされる新たな事業を展開していくことが求められる。

「発達障害のある人たちなど、社会に対して何らかのニーズを持つている人は、生活の中で見過ごされている困り事を察知する能力に長けています。そういった力を発揮する場を広げ、多様な人材が活躍することで、これからの社会が求めているものを見抜き、ビジネスを発展させていくことができるでしょう」

発達障害のある人を積極的に採用し、その能力を生かして業績を上げている企業もある。「先日訪問した大手ゲーム開発会

社には、データ作成や入力業務、画像加工など、コンピューターを使った作業を行う子会社がありましたが、そこで働く社員の大半は自閉症スペクトラム障害のある大卒者です。指示が曖昧にならないように工程管理表を明確に示し、集中して作業ができるよう、シュレッダーなどの大きな音が出るも

のは1か所に配置するなど、様々な配慮がなされていきました。自閉症スペクトラム障害のある人は、配慮が行き届いた環境であれば集中力を発揮して、1つの作業に没頭できるという特性を持っています。そういった強みを引き出すことで、すべての人が重要な戦力となるわけです」

暮らす

地域で共生するための配慮や支援を知る

高齢化が進む社会では、年齢を重ねる中で何らかの障害を持つことになる人の割合が増えている。日本においても、2025年には65歳以上の5人に1人が認知症を発症すると、厚生労働省が予測している（*3）。誰にとっても暮らしやすい共生社会をつくることが一層求められている。

「発達障害のような、外見からは分かりにくい障害に対する社会の理解は、まだ十分ではありません。特に最近では、自然災害が発生した際、避難所などで障害のある

人たちが生活できず、行き場を失ってしまう事例が見られます」

熊本市は、2016年の熊本地震で、障害のある子どもがいる家庭が指定避難所に行くことができなかつた事例を踏まえ、市内の特別支援学校6校を、障害のある子どもとその家族に特化した「福祉子ども避難所」に指定した。

大規模な自然災害が各地で発生する中、地域にどのような人たちが暮らし、どのような支援や配慮を必要としているのか、お互いに理解できる仕組みが必要だ。

* 3 厚生労働省「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（概要）」